

2007年度 卒業論文講評

2008年2月 小関 隆志

遊佐 愛 「動物実験を取り巻く日本の環境 ～動物実験の削減に向けて～」

動物実験について、日本ではあまり議論が活発ではないようです。日本よりも欧米諸国において、動物実験に対する意識が高く、動物実験に反対する動きも盛んで、なかには過激な行動に出る団体もあるという印象があります。

ただ、日本でも動物実験は一般市民の目に触れないところで行われているわけで、目に触れないから普段は意識することもないのでしょうか。そうはいても、私たち消費者が購入する医薬品や化粧品などは動物実験を経て商品化されているものが大半ですから、知らない間に動物実験の恩恵を受けているわけです。知らないというのは恐ろしいことです。

遊佐さんは動物実験の問題に着目しました。この論文の優れている点は、動物がかわいそうだから実験をやめろ、という単純な主張ではなく、動物実験に代わって医薬品等の安全性を確かめる手段はあるのか、(動物実験への意識が高い欧米ではなく)日本において動物実験を削減する方法は何か、という極めて現実的な解決策を考察している点です。

全体として、完成度の高い論文だと思います。

動物実験の代替法についても詳しく紹介されていますが、「なるほど」と感心させられた点は、動物愛護(保護)に対するイギリスと日本の考え方の違いに関する説明でした。イギリスでは19世紀に、動物を保護すべき対象として認識するようになったが、日本ではそういう認識が形成されなかったそうです。

日本では動物実験に対する法規制が実質的になく、他の先進国に比べて格段に後れていますが、関係者をはじめ、消費者も含めて意識を変えていく必要があると思います。動物実験をしない化粧品を販売するザ・ボディショップのような企業もありますが、まだまだ少数です。動物実験の実態と、代替の可能性を多くの人に知らせて、意識と行動を変えていきたいですね。